

論文

「～どころか（どころではない）」再論

服部 匡
学芸学部・情報メディア学科

Abstract

In this paper, I reexamined the semantic properties of the constructions using '-dokoroka' and '-dokorodewanai'.

In 'P dokoroka Q', the propositions (or properties) P and Q are located on a scale (gradience), where, either (i) Q is stronger than P or (ii) Q is stronger than \sim P (the contextually supposed negation of P). These features of '-dokoroka' can be explained in terms of the general meaning of the abstract noun 'tokoro' as pointed out in Teramura (1984).

In Hattori (1995) I claimed that 'P dokorodewanai' should be explained as conforming to the same semantic principles as 'P dokoroka (Q)'. In this paper I speculate that the meaning of 'P dokoroka' corresponds to an extension of the core meaning of 'P dokorodewanai'.

0 目的・範囲

本稿では、「～どころか」の意味用法を記述する。「どころか（どころではない）」の性質については服部（1995）で説明を与え、「～ばかりか」、「～はおろか」、「～も何も」等の表現との比較も行っているが、考えの不徹底な点もあり、ここに改めて分析を提示すると共に、前稿では考察が及んでいなかった「ところ（処）」の一般的な意味との関連についても述べる。

ここで扱う「～どころか」というのは次の(1)-(2)のようなものである。例えば(1)に対応した(3)のような文はない。つまり、「どころか」に対応した断定の形式はない。¹⁾

- (1) 彼は独身どころか結婚して子供が3人もある。
- (2) 彼は代議士どころか総理大臣になった。
- (3) *彼は独身どころだ。

「～どころか」が、「～どころではない」と関連を有することは明らかである（かつては反語と否定の関係にあったものと考えられるが、現代語では「どころか」で文を終わることは一般的でない²⁾）。少なくとも現代語では、「～どころではない」に比べ「～どころか」の意味・使用条件は単純な形で捉えることが可能であり、まず「～どころか」の本質を見極めた後に「～どころではない」の意味用法を検討するのが得策なように思われる。

「どころか、どころではない」に共通する形態音韻上の特徴として次の2点があげられる。第一に、連濁形であること（トコロ ⇒ ドコロ）。第二に、アクセント上、前要素と一体化してもしなくても良いこと（ホ ン#ド コロカ ⇒ ホンド コロカ）。前の点は「～どまりだ」のような言い方（アクセント上は必ず一体化する）と共通する。後の点は「くらい（ぐらい）」等と共通する。

¹⁾ '-dokoroka (-dokorodewanai)' Revisited

1 「どころか」の構文的性質

1.1 「どころか」に先行する部分について

「どころか」に先行する部分は、(4)-(6)のように述語(述語で終わる句)である場合と、や(7)-(11)のように、述語以外の要素である場合がある。後者の場合、[]内の部分がそれぞれ省略されているものとみる(省略という見方を採らないとしても、意味解釈においてそれらを補わなければならないことは同じである)。(7)-(11)のように省略部分に対応する部分が文中に存在している(下線)場合もあるが、(11)のようにそれが文中には存在しない場合もある。つまり、省略部分は必ず文中から復元できるわけではない。

- (4) 暑いどころか寒い。
- (5) 休みたいどころかもっと長く働きたいくらいだ。
- (6) 元気などころか大病だ。
- (7) 3割 [自治(夕)] どころか2割自治だ。
- (8) 半身 [不随(夕)] どころか全身不随という格好ではあるが、とも角こちらの手中にはある。
- (9) ゆっくり [投ゲル] どころか目にも止まらぬ速さで投げた。
- (10) そこで、一同鴨を見に裏庭に出かけるが鴨 [ガイル] どころか、雀一匹いない。
- (11) 海外投資の収入 [ガ入ル] どころか、海外からの借金の利子を支払う義務を負ったみじめな国になってしまったのです。

1.2 「それどころか」、接続詞的な「どころか」

先行の事柄を「それ」で受けて、「それどころか～」と言うことがある。

- (12) スルタンとて、敵国人をそば近くおくこともなからう。それどころか、マホ

メッド二世は、ガラタのジェノヴァ人の中に、通報者を持っているというではないか。(塩野七生 コンスタンティノープルの陥落)

- (13) —— ロケ現場で2時間待たされたあげく食事と一緒にとれない。同業だから立場がわかるのだろうけど、ムツとしたふうも見せず。それどころか夫が仕事なら、自分の使命は出産とばかりに、食べる食べる。(focus 97.8.25)

出現頻度はさほど高くないが、単なる「どころか」で先行の事柄を受ける場合がある。「なら、で、でも、けど」などと同様、接続詞化したものと思われる。なお、「ばかりか」にも同様に「そればかりか」や接続詞的な「ばかりか」の用法がある。

- (14) 【略】神や宇宙やあの世的な事柄を書いているために信者が出て来ませんかと問われることが時々ある。しかしそんな人は未だかつて、1人として出て来ないのである。どころか、私の文章を読んで、正しくこれを理解した人は、必ず、信じることをやめる。(池田晶子 死に方上手 週刊新潮 04.3.18)
- (15) いや、キリスト教の国じゃなくたって、歴史を見直してもバチは当たらない。どころか、見直さないからバチが当たる。(毎日 01.1.27 夕)

2 「p どころか q」の意味・使用条件

以下では、「どころか」に先行する部分(1.1で述べたような省略を補ったもの)をp、後続する部分をqと表記する。また、p、qの表わす事柄をそれぞれP、Qと表記する³⁾。ここで「P(か否か)」は、文脈・状況において何らかの意味で着目されている事柄である。⁴⁾

PとQはある段階上に収まるのでなければならぬ。これは、例えば「あれは犬どころか猫だ」などとは普通言わないことから分かる

(もしも言うことがあるとすれば、猫と犬がその上に位置付けられる何らかの段階が想定されている)。

以下、PとQの収まる段階のタイプを二つあげながら「pどころかq」の基本的意味や使用条件を明らかにする(すべての場合を尽くしているわけではないが、他の場合も同様に説明できる)。

影山(1980:74)は、「AどころかB」の構文では、Bはある尺度においてAより上位になければならないと述べているが、これは、「どころか」の用例の一部にのみ当てはまる特性であって、妥当な記述であるとは言えない。他の先行研究については服部(1995)で言及した。

2.1 PとQの間に含意関係のある場合

“P(か否か)”は、文脈・状況において何らかの意味で着目されている事柄であると上に述べたが、“Pか否か”の「否」に当たるものとして想定される事柄を \hat{P} で表わすことにする。

彼女はピアノが上手か(どうか)が問題になっているような文脈で、(16) a, cのように言えるが、bは不自然に感じられる。ここで、pとqのそれぞれを文の形にし、前者を否定してみれば、(17) a-cのようになる。

- (16) a 上手どころかプロ顔負けだ。
 b ?上手どころか下手だ。
 c 上手どころかとても聞いていられない(ほど下手くそだ)。
- (17) a #上手ではない。プロ顔負けだ。
 b 上手ではない。下手だ。
 c 上手ではない。とても聞いていられない。

「pどころか」はpに対する一種の打消しの働きを持つと見ることもできるが、それは命題の単純な否定(Pに対する $\sim P$)ではない⁵⁾。また、打消しという働きだけで「どころか」の使用条件が特徴付けられるわけではない。

さしあたり直感的な言い方をすれば、「プロ顔負けだ」は、「上手だ」よりも強い表現であり、「とても聞いていられない」は、「上手だ」の反対事項である「下手だ」よりも強い表現である。すると、(16)を見る限りでは、「pどころかq」ではQはPよりも、いわば絶対値において大きな値でなければならないと言えるように思える。

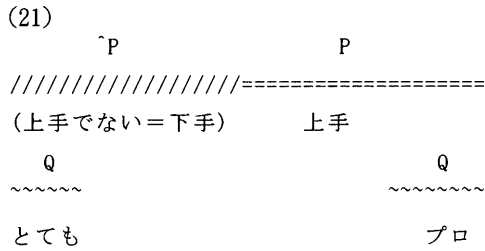
しかし、(18), (19)を観察しよう。(18)では、p「暑い」の反対事項のように思われる「涼しい」がqとなっており不自然さがない。この点で(16) bとは異なっている。

- (18) 暑いどころか涼しい(くらいだ)。
 (19) 暑いどころか寒い(くらいだ)。
 (20) 暑いどころかうだるようだ。

体感される温度に関しては「特に暑いとも涼しいとも言えない」というような中間の段階を考えることは容易である((19)では更に中間段階が考えやすい)。これは、「暑い」は不快さを感じる状態であり「涼しい」は快適さを感じる状態であること、特に快適さも不快さも感じない状態がありうること、によると思われる。

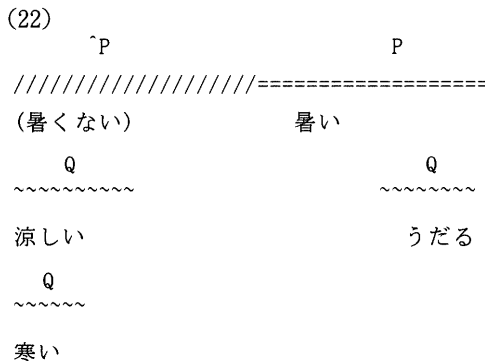
もちろんピアノの上手さに関しても「特に上手でも下手でもない」段階を考えることは可能であるが、そうした段階が文脈・状況を問わず常に想定できるわけではない。中間が特に意識されないならば、実質的には「上手か、さもなければ、下手か」という二分法的見方になるわけである。

これを(21)のように図示することができる(図は右に行くほど上手であり左に行くほど下手であるという段階を示している。語句を省略して示す)。(21)では、P“上手(だ)”の領域と相補する(つまり \hat{P} にあたる)領域をおよそ表わす「下手(だ)」はqとして不適切であり、それよりもより左の(下手さの強い)部分を担う「とても聞いていられない」はqとして適切である。



ここで「プロ顔負けだ」は「上手だ」を含意し、「とても聞いていられない」は「下手だ」を含意する。それぞれの組は、狭い意味での scale を形成し、前の組と後の組とは互いに逆の方向性を持っている。

一方 (22) では、P “暑い” と相補する (~P) 領域を表わす「暑くない」は q とはなれず (“暑いどころか暑くない)、それよりも左の (暑くない度合の高い) 領域を表わす「涼しい」や「寒い」は q になれるわけである。



以上を考慮すれば、「p どころか」の意味・機能は次のようなものと考えることができる。⁶⁾

- (23) “P か (否か)” という問題設定の妥当性を打消し、実は P よりも (または、~P よりも) 高段階 (下限が高い) の Q であることを示す。

(ある段階上で) “P か否か” を問題にすることは、それら二者の分かれる点 (一つの方向への見方と他の方向への見方が分かれる点である) のどちら側であるかを問題にするとい

うことであって、その点を関心の中心と見ることもできる。従って (23) はまた、「関心の中心から外れたところにある値である」ことを示すとも言える。そのため、意外、期待外れといった意味合いを生じることも多い。

ここで観点を改めて、「p どころ」というのは、「P と ~P とが分かれる地点 (の近傍)」のことであると考え、「ところ=処」の一般的な意味と関連付ることも可能である。

寺村 (1984) によれば、トコロの中心的意味は「ある全体を視野に入れながら、その一部分にスポットライトを当てるときそのスポットライトの当たる部分、というように捉えるのが正しく、「その部分と全体は、空間的な広がりでも、時間的な広がりでも、またもっと漠然とした状況でもよ」い。また、この中心的な意味は、実質的な名詞としてのトコロはもちろん、接続助詞化した「~ところ、~ところに、~ところを、~ところで」や助動詞化したトコロダにも保たれているという。

このような考えを適用すれば、「p どころ」というのは、段階の中で、特に焦点が当てられる部分 (P と ~P が分かれるあたりの部分) のことであり、「そこではない (そこから外れた部分である)」というのが「p どころか」の意味であると考えられることもできる。

2.2 P と Q の間に含意関係がない場合

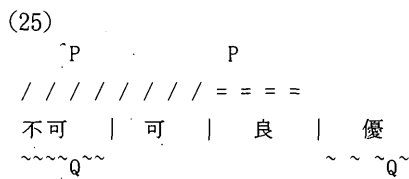
前節の例のような含意関係が存在しない場合にも「どころか」は用いられる。

- (24) (ある科目の試験で、何とか良を取りたいものだと思っていたが)
- a 良 [を取る] どころか優を取った。
 - b ?良 [を取る] どころか可を取った。
 - c 良 [を取る] どころか不可だった。

ここで、c の Q “不可だ” は P の否定 “良を取らない” を含意するが、a の Q “優を取る” は P “良を取る” を含意しない (ただし、「優を取ることができる」は常識的には「良を取る

ことができる」を含意すると思われる)。これらの表現は、狭義での scale とは区別される rank を形成する (Lehrer (1974))。

この場合、文脈上着目されているのは、論理的に厳密な意味での“良を取るか、良を取らない (= 優か可か不可を取る) か”ではなく、“良を取るか、もっと低い評価 (可か不可) を取るか”である。つまり、関心の中心は“良か、それより低い評価か”が分かれる点にあり (この点において両方向への見方が分かれる)、文脈上問題になる $\sim P$ は“可か不可を取る”である。やはりこの文は“P か $\sim P$ か”という問題設定を踏まえ、実は P よりもっと高段階にある“優を取る”、あるいは $\sim P$ よりもっと高段階にある“不可だ”であると述べていると言える。つまり、(23) によって説明可能である。図示すれば (25) のようになる。



もっと文脈・状況や共有知識に依存した例も考えられる。例えば、太郎は普通表に出て来そうにない大物であるが、次郎は、さらにもっと出て来そうにない大物であるというような想定を踏まえて、(26) のように言える。ここでも、Q “次郎が出てくる” が P “太郎が出てくる” を含意するわけではないが、P と Q とは一種の語用論的に形成される段階の上にあると言える。このような場合にも、「p どころか q」の働きは (23) の図式によって説明可能である。

(26) 太郎 [が出てくる] どころか次郎が出て来た。

2.3 小量表現との関連

「どころか」による並列で特に注目に値するのは、述語に対して量限定の働きをする小量表現に関わる事実である。(27)-(33) を見られ

たい。p 「かなりある」を含意する「ものすごくたくさんある」が q になりうること、P とおおよそ相補する領域を表わす⁷⁾ 「そんなにない」や「あまりない」が q になりにくいこと、p の否定を含意する「殆どない」や「全然ない」が q になりうることはここまでの説明から自ずと導かれる。興味深いのは、一見同様の量領域を担っているように思われる「ちょっとある」と「ちょっとしかない」の相違、すなわち (28) と (31) の相違である。

- (27) かなりあるどころか、ものすごくたくさんある。
 (28) *かなりあるどころか、ちょっとある。
 (29) ?かなりあるどころか、そんなにない。
 (30) ?かなりあるどころか、あまりない。
 (31) かなりあるどころか、ちょっとしかない。
 (32) かなりあるどころか、殆どない。
 (33) かなりあるどころか、全然ない。

「ちょっとしかない」は否定的な方向性を持った表現であり $\sim P$ より高段階の領域を表わすと言えるが、「ちょっとある」は肯定的な方向性を持った表現であり、 $\sim P$ より高い領域を表わすとは言えない (服部 (2004) 参照)。

具体的な数値を含む表現でも、量限定の場合には、(34) のように q が p よりも大きな値を含むことはできるが、p よりも q が小さな値を含むことはない。

- (34) 1万円 [ある] どころか1万5000円ある。
 (35) *1万円 [ある] どころか {1000円・100円・1円} ある。
 (36) 1万円 [ある] どころか {1000円・100円・1円} しかない。

やはり「1円ある」は肯定的な方向性の表現であり、「1円しかない」は否定的な方向性の表現である。

なお、「ほんの」によって小量性を強調したり、「だけ」を付加したりしても表現の方向性が変わることはない。⁸⁾

- (37) #100 回どころか、ほんの2・3回やったことがある。
 (38) #100 回どころか、2・3回だけやったことがある。

要するに、(PよりQが高段階なのでなければ) ^PよりQが高段階でなければならず、そのためにはPとQは反対の方向性を持たなければならないのである(pとqが形式的に肯定-否定の関係になければならないわけでは必ずしもない。これは、前節までの例から明らかである)。

2.4 段階配置の二つの型

「どころか」の意味・機能はこのように、あくまで一つのものであると考えられるが、PとQとの段階上の配置関係に注目すれば、1) PよりQが高段階の場合(延伸型)、2) ^PよりQが高段階の場合(対極型)に分けることもできる(前稿でも述べたように省略部分の解釈に応じてどちらとも決められない例もあり、このような区別は本質的なものではない。むしろ両者の可能性が裏腹に存在していることが「どころか」の本質であるとさえ言える)。

まず、対極型配置の例をいくつかあげておく。対極型の場合には「むしろ、逆に、かえって」などの語句を挿入できることが多い。また、pとqを交換しても文としては成り立つ(例えば「暑いどころか寒い」と言えるなら「寒いどころか暑い」とも言える)。

- (39) 商売のじゃまどころか、むしろ助けになる。(朝日 91.10.14)
 (40) 自民党はこれを抑え込むどころか、逆に押しこまれ、ずるずると後退を続けたというのが実態だ。(毎日 97.4.7

夕)

- (41) このため「子どもが毎日きつそうだ」「ゆとりどころか、かえって忙しくなった」「楽しい行事が減って学校がつまらなくなった」という声が現場から聞かれる。(毎日 95.1.11)

次に、延伸型配置の例をいくつかあげておく。延伸型では、pとqは一般的には交換できない(例えば、「涼しいどころか寒い」とは言えても「寒いどころか涼しい」とは言えない。「寒いどころか涼しくて気持ちがいいくらいだ」とは言えるが、これは対極型に当たる)。⁹⁾

- (42) かりに百歩ゆずって、いや百歩どころか千歩ゆずって、あの男が生存者とした場合、どうして名乗って出なかったのであろう?(三好徹 大撃墜)
 (43) 人のあまり食わぬものを食べたことがある。まんぼうを刺身で食べたことがある。しかし人の、あまりどころか全く食べたことのないものを食べたからとて、そんなことは自慢にもならなければ、ほんとのところ、百万言ついやしても説明できるものではない。(中野重治 あけびの花)
 (44) 「少しは役に立ったかね?」
 「少しどころか、大いにです。(三好徹 大撃墜)

Qが「~くらいだ(ぐらいだ)」や「~ほどだ」という形をとることも多い(対極型配置に多いようであるが延伸型配置の例もある)。

- (45) 「退屈しませんねえ」どころか、次はどの催し物にしようか、目移りして迷ってしまうくらいだ。(朝日 89.5.16 夕)
 (46) 社会党には、しらけるどころか、もう見切りをつけたいくらいだ。(朝日 93.1.7)

3 「p どころではない」との関係

既に述べたように「どころか」と「どころではない」の間に対応関係があるのは明らかである。一般に「p どころか q」と言えるならば、「p どころではない。q」とも（少なくとも「p どころではなく q」とは）言える。「どころではない」は(23)の前半に当たる(47)のような意味・機能を持つものと見れば良いように思われる。

- (47) “P か (否か)” という問題設定の妥当性を打消す(暗に、P よりも(または、 \sim P よりも) 高段階の Q であることを示す)。

実際、「どころではない」にも、延伸型・対極型配置の例が見られる。(48)–(51)は延伸型配置の例であり、(52)–(55)は対極型配置の例である(ただし、後者の例は、下に論じるような「余裕がない」用法を別にすると、比較的少ない)。

- (48) 【略】 約三割の病院が、医業収益が医業費用を下回る「赤字病院」。**【略】**だが、ある病院関係者は「三割どころではない」という。「費用の中には借入金の金利が入っていない。それを入れれば、半数以上が赤字」という。(朝日 93.12.15)
- (49) 小柳ルミ子、南沙織と並んで“三人娘”といわれた頃の人気は、ピンク・レディーやキャンディーズどころではない。(focus 96.08.14)
- (50) 前出の関係者に聞くと、内実は「出資法違反どころではない、文字どおりの詐欺商法」らしいのである。(focus 97.5.21)
- (51) いまはもう自分は、罪人どころではなく、狂人でした。(太宰治 斜陽)
- (52) 確かに都銀は「痛めつけられた」どこ

ろではない。9 月中間決算は過去最高益になった。(朝日 88.12.21)

- (53) 10 年後、20 年後……となっていくと、「日本」の世界的立場も「経済大国」どころではない。借金大国、さらには世界からも無視されるような気がする。(毎日 98.3.14)

- (54) 【略】 と夕霧は思い、宮を軽んずる気持にもなるのであった。

しかし衛門督は軽んずるどころではない。宮の欠点など考えられもしない。(田辺聖子 新源氏物語)

- (55) 労働もせずに大金を手にし、しかもそれを恥としないとは、住む家も買えない庶民からすると、うらやましいどころではなく、「こじき」以外の何ものでもない、とわたしは思うからだ。(朝日 89.5.12)

しかしながら、「p どころではない」の実例は、実は、次のようなものが多い(当該の用法を厳密に区別できるわけではない)。これらは、「他の、より意識を占有する事情の存在により、P などは問題にならない、考慮する余地がない」のような意味である。

多くの場合、p は動作性の動詞のスル形に当たるものであり、その場合は「P などする余裕がない」とか「のんびり P しているような場合ではない」とかいった意味合いを生じる。

- (56) 今は食事どころではない。まず安否の確認だ。
- (57) 工事の音がうるさくて、読書どころではない。
- (58) 家事や育児に忙しくて、海外旅行どころではない。
- (59) 人類の食糧が逼迫している時に、犬や猫の餌どころではない。
- (60) マスコミは崩御のニュースで埋め尽くされ、外国の大統領選挙どころではない。

こうした例に(47)の図式を適用するとすれば、状況において「それだけの余裕のある度合(逆方向から見れば「それだけの余裕のない度合)」のような段階が背景となっていると一応言える。服部(1995)ではそのような考えから、これを(47)の特殊な場合であると見た。この場合、一種の対極型配置(食事をするだけの余裕があるかどうか→ない、というより、もっと余裕がない)となる。現代語の用例の解釈としてはそれでも良いように思われるが、実例がこのような用法に偏る理由は直ちには明らかでない。

用法の派生関係に関して、次のような説明もありうる。それは、(61)のような意味(そこから、より重要な事情Qの存在が暗示される)を「どこではない」の一次的な意味と考え、その関係が、意識主体・状況への結びつきを離れ特定の段階上に定位されることにより(47)のような意味・機能が派生されたという説明である。今は、そうした説明の可能性を指摘するに止める。¹⁰⁾

- (61) (意識主体にとって)関心の中心はP(か否か)にはない。当該状況はそのような局面ではない。

以下、「余裕がない」のような意味の用法の実例をさらに挙げる。

- (62) 高橋さんは「本来の目的からすれば一歩後退でも、地元の人も腹が減っては植林どころではない」と語っている。(朝日 88.3.23)
- (63) 「それにしても日本は変わった」。びっくりすることの連続で、“第2の故郷”に懐かしさを感じるどころではないという。(朝日 88.5.10)
- (64) 「ボロボロになった明治の権威をかうじて救ったのが、新美教授の1件だったな」
債権法だけで就職を棒に振った学生には、

「明治の権威」どころではない。(朝日 91.12.28)

- (65) おめでとう、どこではないペルーの日系新大統領。経済で苦境、テロも活発化の事態に(朝日 90.7.24)
- (66) (エリツィン政権は)あれだけ議会と険悪な対立状態にあり、北方四島どころではないというのが本音ではないか。(毎日 93.7.11)

次の例は、対照的な表現(「すき」と「きらい」)が並置されているものである。

- (67) 私には、いまの生活が、たまらないのです。すき、きらいどころではなく、とても、このままでは私たち親子三人、生きて行けそうもないのです。(太宰治 斜陽)

同様の用法で「それどころではない」の形をあげる(「それどころではない」がこの種の用法に限られるわけではない)。

- (68) 家の中で、親子4人。のんびりと読書でも思っても夫のテレビの音がうるさくて、それどころではありません。(朝日 90.5.1)
- (69) 雨漏りに閉口して糸が「せめて屋根を直して下さい」というと、隆盛は「いま日本国中が雨漏りしているんだ、それどころではない」といい、修理をしなかった逸話も、このころのことである。(毎日 95.6.11)

4 ま と め

「どころか」の意味用法の分析を示すと共に、「どこではない」との関係性を簡単に考察した。なお、「どこではない」には、「どころの騒ぎではない」、「どころの話ではない」、「どころではすまない」など、多くの派生的な形が存在する。それらについては別に論じる予定である

(服部 (2004a) で一部に触れた)。

また、用法の歴史的な変化・展開については、今後の課題としたいと考えている。

注

朝日新聞・毎日新聞の記事データは、それぞれの新聞社の許諾を得て研究用に使用しているものである。

1) もっとも、(70)-(72) のように、数値や段階の表現に「どころ」を付して「その周辺の値/段階」を表わす用法はあり、これは、おそらく歴史的にはここで扱う「どころか」と関連を有するものと思われる。

(70) 【【略】したら内地米の方に……何等どころにしますかなあ】(有島武郎 星座岩波文庫)

(71) 十八世紀の初頭、あいも変わらず外国からやってきた三流どころの画家が巨匠然と振る舞い、イギリスの画壇は沈滞の極にあった。(毎日 97.8.10)

(72) 個別材料株の物色で平均株価は1万9100円から1万9500円どころのボックス圏での小動きの公算が大。(毎日 94.11.20)

2) 近世語では、「～どころか」で文が終わる例が見られ、「～どころではない」に対応した反語(または反語的な質問)の形と思われる(湯澤 (1957, 1982))。

なお、現代語でも、まれに反語的な例がある。

(73) 本人は、とても平穏で甘美な世界を通過してこの世にもどってきたつもりだが、異国で手術の手配をした仲間の女優の証言では、「甘美な世界どころですか。地獄の底からのような声でうめいてましたよ」ということになる。(朝日 91.5.16)

3) 厳密には、PとQは、命題、または、対象から命題への関数と考えられる。

4) ある命題Rについて、「Rか?」と問うことと「Rではない(～R)か?」と問うことは論理的には等価なはずである。しかし、田野村(1991)によれば、実際の言語使用では、文脈上所与の命題があればそれが疑問文として用いられやすいなどの傾向があるという。「どころ

か」の場合にもやはり、文脈で言及されるなどして所与の事柄がPとして用いられやすいように思われる。

5) 通常の否定文であっても、例えば次のように修辭的な否定文では、必ずしも命題の単純な否定を行うとは言えない(「大間抜け」が「間抜け」を含意するとすれば)。

(74) 確かに間抜けではない。大間抜けだったのである。(週刊文春 02.11.17 やっぱり大間抜け 菅直人が釈放を要求した「工作員全リスト」)

6) 高段階という言い方は誤解を招きかねないので補足する。例えば次の文では、「低投票率の度合」が問題とされており、それに関して50%は60%より高段階である。

(75) 今度の参院選挙の投票率は60%どころか50%そこそこで、史上最低である。

7) 「かなりある」を否定して「かなりない」とは言わず、この場合の $\sim P$ を表わす適切な形式は存在しない。「かなり」や「相当」等を含む文を命題全体として否定することは難しい。こうした問題は、服部(1990)で取り上げたことがある。

なお、次のような例外的発話をTV番組で観察した。

(76) 一升がかなり減ってこない。(「探偵ナイトスクープ」2004.12.10. 一升杓の米粒を一万粒まで出して数えたところで、米の減り具合を見ての発話)

「かなり減ってくる」という(一万粒も出したことから)当然のように期待された命題の打ち消しを行うものであるか、または、「《減らない度合》がかなり大きい」という意味であるかのどちらかと思われる(後者ならば、「かなり減ってくる」という命題全体ではなく「減ってくる」という述語のみが否定されているのでここでの問題とは無関係である)。

8) ただ、次のような文は許容される場合があるかとも思われる。この種の文については服部(2004b:99)で指摘した

(77) 全員来るところか、太郎(一人)だけ来た。

9) 数値の表現等を含む、延伸型配置の「～どころではない」では、「どころか」を「やそこら」に置き換えられることが多い(10万円どころではない→10万円やそこらではない)。

「～やそこら」とは「～またはその近傍」であるとすれば、上の事実も、「P どころ」が「P と P が分かれる線」（この場合には P という数値）の近傍を表わす、という考えを支持する。

10) 「どころではない」の早い用例として知られる（日本国語大辞典）次の例は、「余裕がない、そんな場合でない」のような意味に解して矛盾しないものである。

(78) 「当年の御慶とかこふか」

「いやいや御慶所ではなひ」（大蔵虎明本狂言・文山立）

(79) 十郎謡を謡ひながら来り、【略】團三郎【略】「十郎様か。嗜ましませ。謡どころではございませぬ」とて叱る。（兵根元曾我・元禄歌舞伎傑作集上）

また、「どころではない、どころか」について、湯澤（1957）の挙げる近世前期京阪語の用例のすべては上のような用法として解しうるものである一方、湯沢（1982）の挙げる近世後期江戸語の用例は「余裕がない」用法と、それ以外の一般的な段階的（対極型・延伸型配置）用法とが入り混じる。

なお、「どころではない」の歴史に関しては（注1に示したような用法の他）、「所」の次のような用例との関連も考慮しなければならないように思われる（「所」が連濁したかどうか不明である）。

(80) 大名：あまりにたにたとないふそ。昔が思ひたされてかなしいに。やゝ大名とあらふずる物がか様になげく所ではあるまひ。いざ目出たうわらふていのみず（狂言記・二千石）

(81) 太郎冠者：是は御もつたいもなひ事仰せらるゝ、何がこなたのあれへござる所でござらぬ、わたしがまいつてみて参らう（大蔵虎明本狂言・武悪）

これは、現代語での「ところだ」の次のような用法に近いようにも解しうる（現代語では

「～ところではない」という否定の形では用いられないが）。

(81) 本来なら、私がやるどころです。

(82) ここが日本なら、醤油をたらしているところだ。

田窪（1993）によれば、本来場所を表す「ところだ」が「時間」に拡張されると、時系列の中の場面の切片のようなものを表し、発話者の観察視点がある場面を表すといえる。さらに、「ところだ」には上の例のように、時系列の流れのなかで、予定されている、あるいは、本来あるべきコースを示す、シナリオの一場面のようなものを表わす場合があるという。

引用文献

- Lehrer, Adrienne (1974) *Semantic Fields and Lexical Structure*. North-Holland
- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』松柏社
- 田窪行則 (1993) 談話管理理論による日本語の反事実条件文『日本語の条件表現』くろしお出版
- 田野村忠温 (1991) 疑問文における肯定と否定『国語学』164, 115-128
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 服部匡 (1990) 命題否定に関する覚書『徳島大学教養部紀要 (人文・社会科学)』, 26, 110-118
- 服部匡 (1995) 「～どころか (どころではない)」等の意味用法について『同志社女子大学日本語日本文学』7, 43-58
- 服部匡 (2004a) WWW 検索と日本語研究への応用『日本語学』2月号, 6-16
- 服部匡 (2004b) 小さな量を表わす表現の意味的性質について『言語研究』125, 83-109
- 湯澤幸吉郎 (1957 = 1991) 『増訂江戸言葉の研究』明治書院
- 湯澤幸吉郎 (1982) 『徳川時代言語の研究』風間書房